

私が見た南原、矢内原時代

鴨下重彦

東京大学名誉教授
国立国際医療センター名誉総長
賛育会病院院長・日本学術会議第七部長

南原 繁、矢内原忠雄は戦後相次いで東大総長を務めた。

筆者は南原 繁先生の演述集など著書はよく読んだが、スピーチを聴いたのは一度だけである。それは一九六一（昭和三十六）年十二月二十八日、矢内原忠雄先生の葬儀、告別追悼式が東大安田講堂で行われたとき、友人代表として述べられた先生の追悼の辞であった。今も心に残っているその言葉を要約すると、「新渡戸稲造先生が校長であった旧制一高は、いつ思い出しても懐かしい精神的故郷であること、矢内原君は新渡戸先生に最も近く立っていた一人で、植民政策の講座を引き継ぐことになったのは、奇しき運命であったこと、新渡戸先生以上に大きな感化を与えたのが内村鑑三先生であったこと、昭和十二年、大学を辞職したのは、学問と思想の問題でなく、信仰の問題であったこと、戦時中は如何なる意味でも時局に協力しなかったこと、戦

後東大に復帰してからは大学行政の面で多くの部門に関与し、特に新制東京大学の基礎である教養学部を築いたこと、総長時代も毎日曜の聖書集会を続け、『聖書講義』を何巻か出版し、地方への講演・伝道旅行を欠かさず、学者や教授である以上に預言者・伝道者であろうとし、それが許されなければ総長の職をいつでも辞する覚悟であったこと」等々、静かに目をつぶれば、原稿もなしに直立不動で切々と話された小柄な先生の姿が眼に浮かぶ。矢内原先生は筆者が学生時代から直接聖書の教えを受けた信仰の師であったが、前総長の死を悼み、同じ無教会の信仰をもつ元総長の厚い友情溢れる追悼の言葉を、忘れ難い深い感動をもって聴いた。

* * *

今から八十五年前、一九一八（大正七）年、わが国の乳

児死亡率は史上最高の出生千対一八五という数字を示した。第一次世界大戦の終了で急速な不況に陥り、東京下町では生まれても育てられない子どもに、この子差し上げます、という新聞広告が出る時代であった。これは放置できないと考えた東京帝国大学基督教青年会（現在の東大YMC A）の数人の有志が、妊産婦と乳児を救うために東京市本所区（現在の墨田区）に妊婦乳児相談所を開設した。設立の中心人物の一人は当時民本主義（後の民主主義）の提唱者であった法学部教授の政治学者吉野作造であった。吉野の講義を聴いた学生に南原、矢内原がいた。その相談所が、現在筆者が勤務する賛育会病院となっている。

「洞窟の哲人」世に出る ■

昭和二十年三月十日の東京大空襲では、死者の総数八〇七九四人、賛育会病院近くの錦糸公園は累積する死体の山となり、急遽囚人による挺身隊を組織してその処理に当たったという。一面の焼け野原と化した中で唯一、黒焦げになって残ったビルが現在の賛育会病院外来棟である。

この大空襲の前日、三月九日に東京帝国大学では南原繁が法学部長に就任した。彼はそれまで「洞窟の哲人」と呼ばれ、ひたすら大学における研究と教育に情熱を注ぎ、

沈潜した一学究として、カント、プラトン、フイヒテ、ヘーゲルに親しみ、自らの政治哲学を築き上げた。同じ政治学者として彼が教えを受けた吉野作造教授のような、ジャーナリズムに論陣を張ることは意識的に控えていたようである。

当時戦局はすでに敗色濃厚であり、学部長となった南原は田中耕太郎、我妻栄ら法学部の有力教授と密かに降伏の条件など終戦工作を相談し、若槻礼次郎、近衛文麿、東郷茂徳らと接触したという。しかし当時の内閣には軍部、特に横暴な陸軍を抑える力はずでになく、八月のソ連の参戦と広島、長崎の原爆投下を待たねばならなかった。

ファシズムによる弾圧の時代 ■

これより先、日本ではいわゆる大正デモクラシーのあと昭和に入ってから、軍部が急速に力を強め、ファシズムが台頭してきた。文部省内にも国家主義者があり、軍部と結託して思想統制を始めた。昭和三年の共産党弾圧に始まり、マルクス主義者が標的とされたが、昭和六年満州事変



南原 繁



矢内原 忠雄

の後はりべラるな学者も次々に狙われた。昭和七年新渡戸稲造が松山市で地元の新聞記者に語った「日本を滅ぼすのは共産党と軍閥だ」の発言が大問題になったのはその先駆けであった。歴史に記される主な事件でも、昭和八年京都帝大河上肇の検挙、滝川幸辰の休職処分、昭和十年の美濃部達吉の天皇機関説、満州事変を批判した横田喜三郎、そして昭和十二年矢内原忠雄の筆禍事件である。さらに大内兵衛ら教授グループの大量逮捕(昭和十三年)、河合栄治郎事件(昭和十四年)、津田左右吉事件(昭和十五年)と、りべラるな学者の受難が相次いだ。

この中で矢内原事件は特異である。一部には当時の経済学部の内紛とする見方もあるが、これは誤りで、文部省や軍部、狂信的国家主義者蓑田胸喜らと通じた経済学部の土方学部長ら右翼教授が矢内原を追放したのである。決定的となったのは「日本の国を葬って下さい」というキリスト教信仰から出た愛国の叫びであった。昭和十二年十二月一日辞表提出後、矢内原は「嘉信」という個人雑誌を発行して伝道者の道を歩み、家庭で少数の青年に

聖書講義をする集会を続けた。何度も警視庁に呼び出され、嘉信の発行を止めるよう圧力をかけられたが、屈しなかった。昭和二十年四月、印刷所が戦災で焼けた後は謄写版で嘉信会報として発行を続け、八月十五日を迎えた。

二人の総長の類似点、共通点 ■

辛い戦災は受けなかったものの、敗戦で虚脱状態に陥っていた東京大学にとって最初の明るいニュースは二十年十一月末の矢内原、大内らの東大教授復帰で経済学部が再建され、さらにその直後十二月十五日に南原が総長になったことであった。これは単に東大だけの出来事でなく、敗戦によって精神的廃虚と化した日本の復興のために、特別大きな意味をもっていた。南原の卒業式での式辞はそれまでの総長のお別れの言葉とは全く異なり、祖国を興すもの、人間革命など、学問、大学、平和を論ずる格調の高いものであり、その日の夕刊の紙面を大きく飾った。特に終戦の翌年三月に行なわれた東大戦没学生の慰霊祭における告文は、戦没学生の手記『はるかなる山河に』の序文にもなったが、読む者の魂を揺さぶるもので、多くの国民にも深い感銘を与えた。

戦後相次いで東大総長を務めた南原、矢内原の二人には

かなりの共通点、類似点がある。ともに四国の出身、ともに旧制第一高等学校に進み、東京大学（当時は帝国大学）法学部を卒業、南原は内務省に入り、官吏となる道を選び、矢内原は実業界に入り住友に就職、郷里に近い新居浜別子鉱業所に勤務した後、それぞれ政治学と経済学の助教授として大学に戻り、欧州に留学、若くして教授となった。そのような外面的類似性以上に二人には内面的に共通するところが大きかった。それは青年時代に一高校長であった新渡戸稲造の感化を受け、さらに内村鑑三の門に入り、無教会主義キリスト者として一生を貫いたことによる。

矢内原が辞表を出した僅か三ヶ月後、東大経済学部の大内兵衛、有沢広巳、脇村義太郎らが検挙されるいわゆる教授グループ事件が起きた。逮捕され早稲田警察署の留置所に入っていた大内に南原が教え子の署長を通じて差し入れた本の名は『齋藤茂吉読本』、ルソーの『孤独者の思想的散歩』、そして小川正子『小島の春』。これによって大内がどれだけ慰められ勇氣づけられたか。南原が総長を退任した昭和二十六年十二月六日の東大新聞に「去り行く名総長南原」と題する大内の寄稿がある。

「東大はこれまで十六人の総長をもった。何といっても浜尾、山川は初期の大総長であった。南原は山川の風格を

もって浜尾の大をなしたとげた。何といっても古在、小野塚は中期の名総長であった。南原は小野塚の見識をもって古在に劣らない輿望をになった。」これに倣えば、南原、矢内原は学問の自由を守り、祖国の復興に寄与した戦後の偉大な総長といえよう。

新渡戸、内村の影響 ■

このような類まれな優れた人格はどのようにして育まれたのであろうか。生まれつきの資質は争えず育てられ方も良かったであろう。しかし決定的であったのは青春時代、一高での新渡戸校長との出会い、そして内村の教えを受けたことであつたに違いない。

新渡戸稲造はいわゆるハイカラであった。そのために一高で排斥運動に遭つた程であるが、一方において南原、矢内原をはじめ、当時の一高生に大きな感化を与えた。彼の教育理念は人格の完成と、国際性であった。新渡戸は一高で、神とかキリストとか一言も言わなかつたという。しかし彼の感化を受けたものは自然に内村鑑三の下に集まつた。その聲咳に接した天野貞祐、前田多門、高木八尺、三谷隆正、田中耕太郎といった錚々たる人たちは、戦前は荒れ狂う軍国主義に対して批判的抵抗の姿勢を貫き、戦後は文

部大臣や最高裁長官などとして日本の復興に貢献した。

内村鑑三については明治二十三年、一高教師のとき教育勅語に敬礼をしなかったといういわゆる不敬事件が有名である。そのとき内村を最も激しく攻撃したのは文科大学（現在の文学部）教授井上哲次郎であり、また日露戦争で非戦論を唱えた内村を『わが国体とキリスト教』を著して強く非難したのは初代東大総長加藤弘之であった。したがって内村にとつて、東京帝大は敵国のように思われたであろう。しかし帝大出身の門下から、矢内原をはじめ、浅野猶三郎、藤井武、塚本虎二、黒崎幸吉、江原万里、金沢常雄のような優れたキリスト教の伝道者が輩出した。

若い魂を愛して ■

南原も矢内原も総長時代あるいは辞めたあととは特に、全国各地に講演行脚をしている。

矢内原が昭和三十六年七月、北海道大学で学生相手に行った「内村鑑三とシュワイツァー」が彼の最後の講演となった。二人とも特に高等学校（新制）の生徒に向かつての講演も多かった。次世代の育成をかなり意識して若い魂にメッセージを送ったのであろう。

山形県小国町、叶水という交通不便な僻遠の地に、南原

が日本一の高等学校と評したキリスト教独立学園がある。

一学年わずか三十人足らず、自然の中で農作業や労働、そして聖書に親しみ受験勉強を一切しない、先生も生徒も共同生活をしている。初代校長の鈴木弼美は内村鑑三の門下で東大理学部物理学科を大正十五年に卒業、七年後理学部助手を辞し、内村が関心を寄せていた小国で伝道することを決意し昭和九年に移住した。この学校の講堂の外壁には、「神を恐れるは学問の始め」という旧約聖書、箴言の一節が日本語とヘブライ語で書かれている。南原が日本一と言ったのは校舎が貧しいこと、美しい自然に囲まれていること、生徒たちの瞳が美しく輝いていたこと、この三つの点であったという。彼は学園生に「自分の生涯は立派な先生と良い友達にめぐり合ったことよってなったものである。だから皆さんも良い先生と友人を得るように。」と諭した。矢内原も何度かここを訪れている。

教育の理念・リベラルアーツ ■

南原、矢内原の教育の理念は、ヒューマニズムと自主独立の精神であり、その実現のためのリベラルアーツ（教養）の重視である。特に二人の大きな功績として挙げたいのは、新制大学の発足に当たり南原が旧制一高を基盤として

東京大学に教養学部を作り、その初代の学部長に矢内原を据えたことである。

現在日本では憲法改正の動きがあり、教育基本法の見直しも行われている。南原は戦後の教育刷新委員会委員として、戦後の教育改革で最も強い指導力を発揮した。教育基本法の制定の陰の功労者である。教育は国家百年の大計、というのが南原の持論である。矢内原も自分は東京大学総長として、日本の高等教育あるいは文教政策全体に対して責任をもっている、との自覚を公にしていた。現在教育基本法の見直しを進めている者の中に、果たして南原、矢内原に比肩できるビジョンと見識を有する人物ありや？

宇沢弘文著『日本の教育を考える』（岩波新書）によれば日本の教育が悪化したのは約二十年前、臨時教育審議会（臨教審）以後で、臨教審そのものが、戦後のリベラルな教育を否定して戦前の天皇制社会に引き戻そうとした反動的な悪しき企てとされている。

医学に望むもの

最近医療事故や医師に関わる不祥事が毎日のように報じられ、医事訴訟も年々多くなって医療不信の増大を招いている。この背景には様々な要因があるが、医療側の問題の

一つとしてリベラルアーツ軽視の医学教育が招いた結果ではないか、と筆者は受け止めている。

筆者が医学部三年になった時、矢内原総長が学内で「医学に望むもの」という講演をされた。「最初演題を『医者と坊主』としようと思っただけですが、内村（祐之）医学部長に訂正されたのです。」で始まったその講演の核心は「すべての医者は坊主でもあれ」という一言であった。半世紀近くを経た今も医師の倫理として最高の指針であると思う。

これに関連して忘れることが出来ないのは、南原総長を尊敬しその主治医にもなった内科の沖中重雄教授が、不治の神経難病の患者についての臨床講義のときにふと洩らした「医師は牧師の心を持たねばならぬ」という言葉で、筆者の座右の銘であるが、この言葉を改めて重く深く受け止めるとともに、これからの医学、医療の担い手となる次世代の医師諸兄弟に贈りたい。



かもした しげひこ 北海道生まれ、五九年東京大学医学部卒業。小兒科学専攻。六四年大学院終了後米国留学。東大助教授、自治医科大学教授を経て、八五年東大教授、九二年東大医学部長。九四年停年退官後、国立国際医療センター病院長、総長を経て、現職。「こどもの病気の地図帳」（講談社）『実践小児診療』（日本医師会）ほか編著書多数。